武蔵国分寺跡資料館だより

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum Newsletter

編集・発行・印刷

見る／学ぶ／訪ねる／
武蔵国分寺跡資料館
Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

［住所］ 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
［電話］ 042-323-4103 ［FAX］ 042-300-0091
［E-mail］ museum@city.kokubunji.tokyo.jp
［HPアドレス］
http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/1733/009819.html

2012.4
創刊 10 号
記念特別号

七重塔模型がおたかの道湧水園へ

訪れる方々に永く親しまれていた国分寺市役所旧本庁舎前の武蔵国分寺七重塔推定復元模型が、旧庁舎解体に伴い、平成 24 年２月末におたかの道湧水園内へ移設されました。今回は国分寺と塔についてご紹介します。

武蔵国分寺七重塔推定復元模型

この模型は市内北町の田中為義（ためよし）棟梁が復元模型設計書を参考に 10 分の１スケールで製作したものです。平成５年に市が寄贈を受け、市役所旧本庁舎前に設置されていました。

旧本庁舎前設置状況（平成 22 年）

旧本庁舎前からの搬出

おたかの道湧水園へ搬入

クレーン車で設置

移設ミニセレモニー

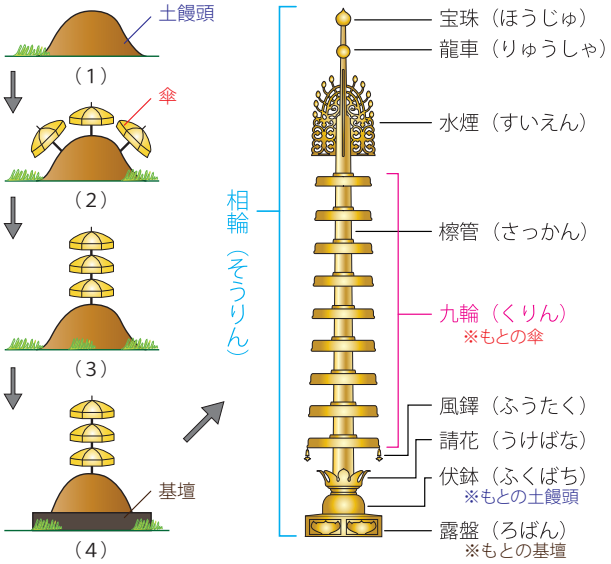
平成 24 年 2 月 29 日の公開初日はあいにくの雪でしたが、移設された模型の前でミニセレモニーを行いました。

国分寺と七重塔

塔の起源

塔は、サンスクリット語の Stūpa（ストゥーパ）を漢字で音写した「卒塔婆」の略語です。卒塔婆は「塔婆」とも略されます。ストゥーパは、インドで死者を葬る施設としてはじまり、インドでは覆鉢塔とも呼ばれています。釈迦の死後に遺体が火葬され、信者によって分けられた遺骨を、塔を造って納めたことから、その後仏教に導入されました。

インドでは死者を地下に埋めて地表に土饅頭のように土を盛る埋葬の風習があり（1）、死者に対しても日よけのための傘を立てるようになります（2）。そして、多くの人が傘を立てたので、傘を屋根のようにまとめ（3）、さらに雨で土が流れ出ないように基壇を設けます（4）。これが中国では宮廷建築に代表される楼閣建築と合わさり、木造の層塔などが造られます。塔の相輪は、インドで発生した塔の名残りと考えられています。



中国で発生した木造の多重塔はやがて日本へ伝わりますが、中国の塔と日本の塔では内部の構造が異なっています。中国の塔は、内部に階段が設置されていたのに対し、日本の塔は中心の心柱が上まで貫いている吹き抜け状になっており、上には登れない構造でした。現存する最古の五重塔である法隆寺の五重塔（7世紀末～8世紀初）にも階段はなく、修理などのための梯子があるのみです。

日本の多重塔の内部が一層で、上に登れない理由は明確ではありませんが、大宝元年（701）に制定（完成）した大宝律令の営繕令第3条では、楼閣を経てて人家を覗き見ることの禁止や宮中内に建物を建てる場合は日照を確保することが規定されています。また、現代でも神輿に乗る行為や神輿を上から見下ろすのを禁止している地域もあり、尊いものの上に乗る（登る）ことや、見下げることを文化的に避けてたことがあったのかもしれません。もちろん技術的な違いもあったかもしれませんが、塔の形が日本に伝わった時に、舎利を納める高い建物を建てることが重要視され、登って何かを眺めるといった目的はあまりなかったと思われます。

塔に納められた舎利とは、サンスクリット語の sarira（シャリーラ）の音訳で、本来は「遺骨」、「死骸」、「身体」の意味ですが、特に釈迦や聖者の遺骨のことを指し、釈迦の遺骨（遺灰）、歯、髪などは仏舎利といいます。

初期の塔には仏舎利が納められていましたが、釈迦の遺骨などが塔の数ほどあるはずもなく、日本では舎利を象徴する玉などを代用することが見られます。これに対して、釈迦の教えを説いた経典を法舎利といい、塔には基本的にいずれかの舎利が納められています。

七重塔を持つ国分寺は「国の華」

天平13年（741）正月、聖武天皇の妻である光明皇后の父、藤原不比等の財産食封五千戸が返上され、そのうち三千戸が諸国画一の造寺実現の費用に充てられたことをきっかけに、同年2月、聖武天皇は国分寺建立の詔を発布し、諸国にそれぞれ七重塔一基を敬って造り、合わせて金光明最勝王経と妙法蓮華経各十部を写経させるよう命じました。そして、自らも金字で金光明最勝王経を写し、（諸国の）塔ごとに一部ずつ納めたいと述べています。また、国分寺の選地にあたっては、「造塔の寺（国分寺）は「国の華」たり」として、必ず好所を選んで長く久しく保つよう命じています。国分寺は、この詔によって全国60余りの国に建立された官立の寺院で、僧寺（金光明四天王護国之寺）と尼寺（法華滅罪之寺）がセットで置かれました。

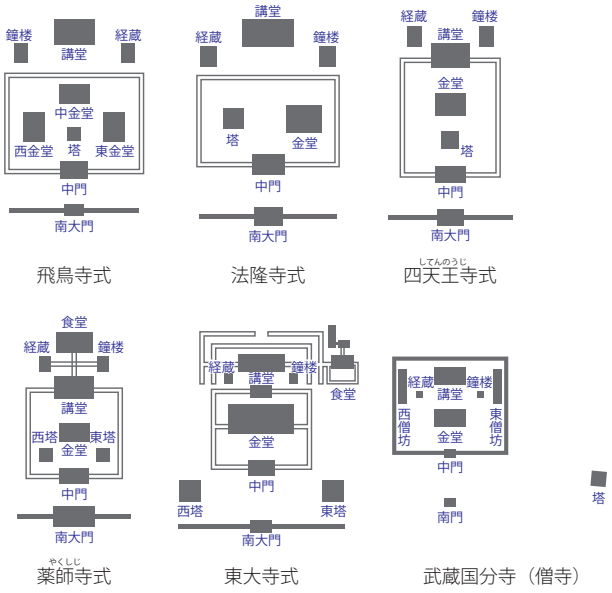
詔の前半は、文武天皇を父に、藤原不比等の娘宮子を母とする聖武天皇が第45代天皇に即位した神亀元年（724）から数年の間に起きた疫病（天然痘）の流行や飢饉、大地震、藤原四兄弟の死による内政の混乱、藤原広嗣の反乱などに対して国を安定させるために行ったいくつかの仏教的施策をまとめたもので、天平9年（737）3月の「国ごとに釈迦仏像一体と挟持菩薩二体を造り、大般若経一部六百巻を写させる」ことからはじまり、天平10年（738）4月の「国家隆平のため、諸国に最勝王経を講読させる」、天平12年（740）6月の「国ごとに法華経十部を写し、七重塔を建てさせる」、同年9月の「国ごとに観世音菩薩像一体を造り、観世音経十巻を写させる」までの命令を集約したものです。

詔の後半の3つの条文には寺の財源、寺の名前、僧侶の数などの具体的内容が示され、聖武天皇の国分寺造営を本格的に具体化しようとする思いが表れています。

聖武天皇の願い

国分寺建立の詔では特に七重塔と金光明最勝王経の法舎利が重視されていますが、それはなぜでしょうか。

飛鳥時代に建てられた本格的な寺院である飛鳥寺（奈良県）では、塔は伽藍配置（主要建物の配置）の中心に置かれたのに対し、法隆寺では本尊仏を安置する金堂と並置され、奈良時代は東大寺のように回廊の外に置かれるようになり、金堂が伽藍の中心となります。諸国の国分寺の伽藍配置を見ると、法隆寺式や法起寺式のどちらかというと古い伽藍配置は少なく、東大寺式の伽藍配置が多く見られます。武蔵国分寺も南門、中門、金堂、講堂が直線上に並ぶ東大寺式伽藍配置です。



古代寺院の伽藍配置

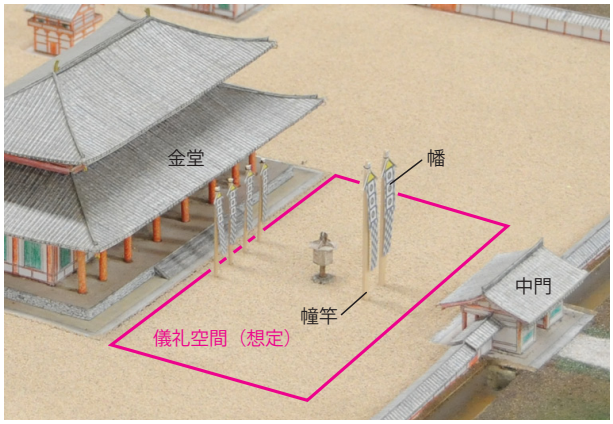
『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』国分寺市教育委員会　平成 22 年より

この伽藍配置の変化を見ると、法舎利を納めた塔中心の伽藍から本尊仏を安置した金堂中心の伽藍へと変化し、塔がシンボル的な存在として回廊の外へ配置されるようになったと捉えることもできますが、むしろ伽藍の中心に金堂が配置されるようになった理由は、崇拝の対象として本尊仏を重視したことのほかに、回廊の中で儀礼を行うために金堂前（周辺）の空間を広く確保するための結果であるとも考えられています。

つまり、塔の格が下がったというわけではなく、伽藍配置が儀礼を重視したスタイルに変化していったことが背景にあるようです。

国分寺建立の詔では、毎月８日に必ず最勝王経を読み、月の半ばに戒羯磨を暗誦しなさいという法会についての規定が見られます。この他にも、疫病の流行や災害などの際に護国を祈願して金剛般若経や仁王経などが読まれ、特別な祈修が行われていました。

実際に武蔵国分僧寺や尼寺の金堂前面などからは寺を荘厳するための幡（P11 発掘調査の窓を参照）を掲げた幢竿の遺構が見つかっています。僧寺では中軸線を挟んで東西に並んで二本一列と四本一列が確認され、この場所で様々な法会や儀式・儀礼が行われたと考えられます。



武蔵国分寺推定復元模型　金堂全面の幡

（武蔵国分寺跡資料館所蔵）

また『大仏殿碑文』によると、東大寺（大和国分寺）の七重塔は、東塔は 23 丈８寸（約 70m）、西塔は 23 丈６尺７寸（約 72m）とあり、高さ８丈８尺２寸（約 27m）の相輪を加えると、実に東塔が約 97m、西塔が約 99mと、100m近い塔が２基も造られています。これは盧舎那大仏を安置した東大寺大仏殿の２倍にあたる高さで、このことからも七重塔が東大寺をはじめとする国分寺の伽藍の中で重要な建物であったことがわかります。

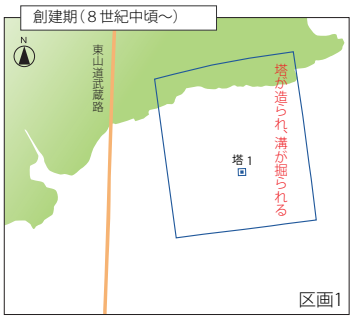
もちろん、金堂などが重要でなかったわけではありませんが、国分寺建立の詔が発布された６年後の天平 19 年（747）11 月に、諸国の寺造営が順調に進まないことに対して、国司の怠惰を責め、郡司を専任として３年以内に塔・金堂・僧坊の完成を催促した命令では、塔がはじめに記されていることから、優先順位が金堂より塔であったことがわかります。また同年の 12 月には、百姓の造塔を請願する者はこれを許すとし、積極的な塔造立の思いが窺えます。

国分寺建立の詔では、天皇自らが金光明最勝王経を説明し、「もし広く世間でこの経を読み、供養し、広めれば、われら四天王は常に来てその国を守り、一切の災いもみなとりのぞき、心中にいだくもの悲しい思いや疫病もまた消え去る。そしてすべての願いをかなえ、喜びに満ちた生活を約束しよう」とある。と述べています。聖武天皇が詔で七重塔の造立を特に勅願したのは、本尊仏を重視し、儀礼を重んじる時代的なスタイルの中でも、七重塔に鎮護国家（外敵退散・国家安寧・五穀豊饒）を招来する経典である金光明最勝王経を安置することが何より重要であると強く感じたためではないでしょうか。

武蔵国分寺の七重塔

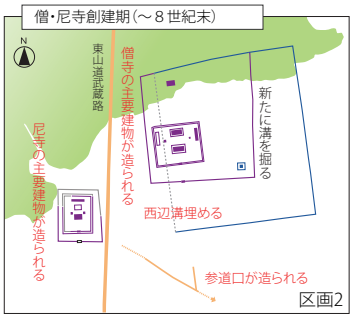
武蔵国分寺では、塔を中心とした伽藍配置が計画され、主要な建物の中でも塔が最初に造られました。この他の上野・下総・美濃国分寺でも同様に塔が先行して造られたことが最近の調査で明らかになってきています。

武蔵国分寺の場合は、その後の造営計画の変更を経て、他の主要建物が東山道武蔵路寄りに配置されたことによって塔が東に離れた伽藍配置となりました。



「造塔」の文字瓦

国分寺所蔵（武蔵国分寺跡資料館展示）



武蔵国分寺の変遷

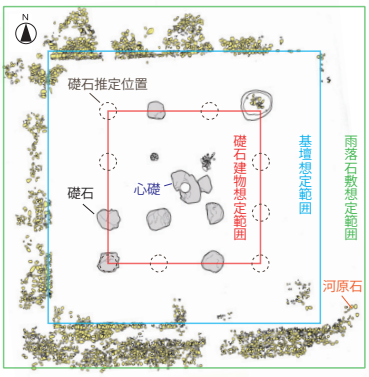
塔跡１の版築

『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』国分寺市教育委員会　平成 22 年より

武蔵国分寺の塔については、『続日本後紀』承和 12 年（845）３月の条「己巳。武藏國言。國分寺七層塔一基。以二去承和二年一爲二神火所一レ燒。于レ今未二構立一也。前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正申云。奉二爲聖朝一欲レ造二彼塔一。望請言上。殊蒙二處分一者。依レ請許レ之。」の記事から、七重塔であったこと、承和２年（835）年に神火（雷火）で焼失したこと、承和 12 年（845）年に前男衾郡大領壬生吉志福正が焼失した塔の再建を願い出て許可されたことがわかります。

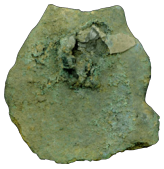
昭和 39 年等の発掘調査によって、『続日本後紀』の記事にある再建された塔は、創建塔の深さ 1.7mの総地業版築の上部修復や、基壇の補修、礎石の据え直しなどを行って同じ場所で建てられたことが判明し、また基壇修復の際に使用した粘土の中に焼損した創建期に使用された瓦が混入していることから、承和２年に焼失した事実も発掘調査で裏付けられています。

再建塔の基壇は一辺 17.7m四方の乱石積基壇で、その上に 9.8m四方の礎石建物が建ち、高さは 60mを超えるものと推定されています。



七重塔跡実測図

心礎



水煙片

国分寺所蔵（武蔵国分寺跡資料館展示）

なお、諸国国分寺の発掘調査では、五重塔と推定されるものもあり、財政事情などによって、七重塔が建てられなかったり、途中で断念する事態が生じていたことも想定されていますが、武蔵国分寺の場合は、『続日本後紀』の記事や発掘調査の成果、そして塔周辺から出土した水煙片からも、塔の一層から上部の相輪を含めた高い七重塔が建てられていたことがほぼ確実となっています。

このように再建された七重塔も、やがて崩壊（焼失か）の道をたどります。現在の国分寺（医王山最勝院国分寺）の縁起では、元弘３年（1333）の「分倍河原の戦い」の際に武蔵国分寺が焼失したと伝えています。七重塔がこの時代まで存続していたかは定かではありませんが、塔跡からは 10 世紀前半頃に焼かれたと想定される補修用の瓦が出土していることから、少なくともこの頃までは存続していたと考えられています。なお、塔跡の西約 50m西方から見つかっている塔跡２については、またの機会にご紹介します。　（学芸員　増井有真）

現在の七重塔跡

七重塔跡には、ひっそりと佇む大きな礎石が残っています。現地で古代の情景を想像し、おたかの道湧水園の模型でかつての威容を感じてみてはいかがでしょうか。

塔の層数が奇数なのはなぜ？

三重・五重・七重…と塔は基本的に奇数ですが、これは仏教の教えとは直接的には関係なく、中国の思想から取り入れられたという考えがあります。桃の節句（3月3日）、端午の節句（5月5日）、七夕（7月7日）など、中国では奇数が揃う日は縁起が良いと言われ、また陰陽思想でも奇数を陽としてることから塔の層数も奇数になったといわれています。なお、『日本書紀』には百済大寺（推定：吉備池廃寺）に九重塔が建てられたという記述があります。

文化財の仕事に携わって Ⅰ

武蔵国分寺跡に捧げた半生

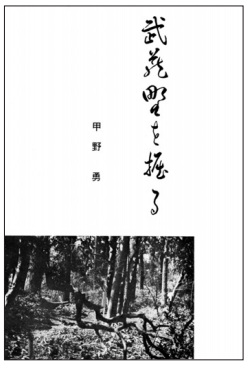
福田 信夫
（前国分寺市教育委員会ふるさと文化財課課長）

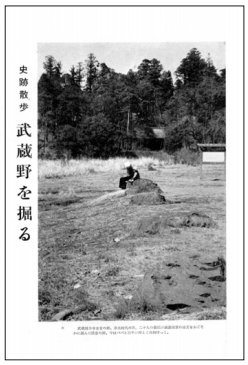
考古学の専門職（学芸員）としての38年間を振り返って、一貫して文化財保護行政に携わらせていただいたなかで、感じたこと、考えてきたことの一端を披露させていただき、僅かでも史跡武蔵国分寺跡をはじめとする市内文化財の保存活用に寄与するところがあれば幸いです。

さて、武蔵国分寺跡のことを私がはっきりと意識しましたのは、昭和49年3月の大学卒業後。学生時代からの延長で多摩ニュータウン開発関連の発掘整理をお手伝いしていました折に、武蔵国分寺跡の発掘や保存活用のため国分寺市で学芸員を募集すると先輩から聞きました。小さな自治体の博物館等を拠点に、継続して地域に密着して市民や子供たちと遺跡の調査や保存活用に関わっていきたいとの思いを強く持って応募しました。

早速、神田の古書店で入手しましたのが、甲野勇（こうの いさむ）先生の名著と言って良い『武蔵野を掘る』。平易な文章の行間に、古代の遺跡ばかりでなく、今を生きる人々への先生の熱い思いが溢れていました。幾度も読み返しました。本の中の時代は少し前ですが、その対象に選ばれた武蔵国分寺跡と周辺の景観に思いを馳せたことを記憶しています。

同年7月、いざ入職してみますと、市立第四中学校建設問題の事態収拾のさなかで、正直、大変なところに入ってしまったと思いました。





甲野　勇『武蔵野を掘る』昭和 35 年

“ 史跡散歩 ” をテーマに「空からみた三多摩の遺跡」からはじまり、「国分寺めぐり」や「奈良時代の庶民の生活」など、国分寺市の遺跡や武蔵国分寺跡についても多く触れられている本です。

関係者の努力で、調査の成果をもとに遺跡を保存して史跡公園整備を行うことと、資料館を建てて出土品や調査資料を収蔵し、公開活用していくという市の方針が打ち出されました。同時に、市によって遺跡調査会が設置され、初めて現地に常駐しての調査を開始するところとなった次第です。

その後は、寺跡の範囲確認調査をはじめ、学校建設、公共下水道整備などの公共事業やマンション、個人住宅などの民間開発に先立つ記録保存のための発掘に追われる日々が20年余り続きました。立ち止まることが許されないような特急列車でありました。その頃は史跡の保存活用に目を向けるいとまもなく毎日が過ぎていきました。

ようやくにして、市では、用地買収の進んだ尼寺跡から史跡整備事業に着手することとなりまして、平成4年度の事前遺構確認調査から、整備工事を経て、平成15年8月の歴史公園開園記念シンポジウムまで全てを担当させていただきました。

後世の削平などで遺構の残りが良くなく、もとより資料が少ない尼寺跡の整備でした。遺構確認調査による成果をもとに、プランニングから、文化庁・東京都との協議、整備委員会での検討、予算確保、市民への説明、工事設計・監督、コンサルタントとの打ち合わせ等々、初めてのことが多く、貴重な経験となりました。また、少しずつですが、事業を通じた市民との交流から、文化財の活用について、考える機会が増えていきました。

発掘中の
尼寺金堂・中門
付近全景
（平成 4 年）

整備後の歴史公園
（平成 24 年現在）

平成 15 年 4 月 1 日に開園した国分寺市立歴史公園「武蔵国分尼寺跡」は、国を代表する歴史公園として、平成 19 年 2 月に「日本の歴史公園 100 選」の一つに選定されました。

引き続き、平成15年度から僧寺跡の整備事業に着手することとなり、基本計画づくりを担当し、当面の確認調査に備えて予備調査を担当したところで、3年目を迎えた係長としてのデスクワークが増え、後進にバトンタッチしました。

史跡整備が進む一方、出土品をはじめとする文化財を収蔵し、公開活用する資料館建設についての論議が高まりました。専門館的な色合いが強い「資料館」よりも歴史のまち国分寺を総合的に理解できる「博物館」が待望されることとなりました。

建設事業は、健康的で文化的な都市を将来像とする市の第2次長期総合計画に位置づけられました。整備委員会における検討を経て、平成5年に基本構想が定められたのです。続いて、平成18年まで10カ年の第3次長期総合計画において、用地買収と基本計画策定が予定されましたが、主として財政難のため延伸され、その後、今に至っても進展していません。ただ、市民の陳情が市議会で採択され、平成21年4月に建設基金が設置されていますので、財政事情の好転に期待を持っています。

（仮称）郷土博物館基本構想書

現地では、平成17年10月8日未明に、出土品を収蔵するプレハブが放火され、甚大な被害が出るという不幸な事態があり、物理的な被害はもとより、私も含め関係者にとって精神的に大きな痛手となって今に響いています。

こうした状況下で、現在の武蔵国分寺跡資料館等の整備を図ることになったのは明るい希望でした。国分寺崖線下、現国分寺東側の旧名主屋敷地の開発計画に対し、史跡追加指定と緊急買収を図って保全した区域です。既存の建物がありましたので、郷土博物館ができるまでの期限付きで、活用することの許可を文化庁よりいただき、改修工事を行いました。

平成21年10月に、おたかの道湧水園と名付けた敷地に武蔵国分跡資料館を、おたかの道を挟んだ附属棟の一部に、おもてなし・地域交流施設（史跡の駅）等をオープンしました。事前の予想を超える皆様の反響を

スロープ設置工事
（１階外）

補強壁工事
（展示室３・講座室）

改修工事の様子

いただき、開園（館）以来の入園（館）者が4万人を超えようとしていますのは、関係者のご支援はもとより、史跡と湧水の魅力のおかげといって良いでしょう。

資料館の２階は、ふるさと文化財課の事務室としていますが、市内でも文化財の集中する史跡武蔵国分寺跡の中心部にあって、文化財を媒介とする市民との協働、地域との連携、事業の促進、災害時の対応などにおいて、圧倒的に有意であり、市役所や教育委員会事務局と離れているデメリットを補って余りあるものと感じてきました。

とにかくも、私は専門職として、保護の対象であります史跡や文化財の価値を正しく把握し、保存活用するために、調査の実施などに力を注ぎ、その価値とその保存に関して、専門家との間に立つ通訳者の意識で務めを果たしてきました。

昨年４月には、懸案でありました文化財の保存と活用に関する条例が施行となり、保護の裾野の拡充のための文化財目録制度や、調査の充実のための文化財調査専門員制度などを設けました。市内には、まだまだ、発見に至ってない文化財が眠っています。今後は、こうしたものにもしっかりと目を向けて、失われてく前に手立てを講じていく必要があります。

今後とも、熱意と関心のある市民の皆さん方とともに、地域の資産である文化財の保存活用に努めていきたいと願っています。

福田 信夫（ふくだ・のぶお）
昭和 26 年（1951）、東京都生まれ。
明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業。
昭和 49 年国分寺市役所入職。教育委員会で埋蔵文化財保護・史跡武蔵国分寺跡の保存整備に携わり、平成 18 年 4 月より教育部ふるさと文化財課課長を務め、平成 24 年 3 月に定年退職。

文化財の仕事に携わって Ⅱ

文化財行政 35 年を振り返る

太田 和子
（前国分寺市教育委員会ふるさと文化財課文化財普及担当係長）

国分寺市に入職して35年経ちました。ご存知でしょうが、奈良時代に建立された武蔵国分寺の跡があることから、市の名も国分寺といいます。

以前は、十年ひとむかしと言いましたが、その言い方だと「むかし　むかし　むかし」昔話の出だしにしては、ちょっとしつこいですね。

まあ、そんなむかしに、国分寺市は市の歴史を編さんする事業を立ち上げました。私は、ご縁があってその事業に従事することができました。市史編さん事業は、武蔵国分寺に関すること以外の歴史を見つけ出すことを命題としていました。というのも、武蔵国分寺についての研究は古くから行われていて、その成果の蓄積は多く把握され、改めて探し出す必要はないと判断されていたからです。

学生時代に江戸時代の農村史を学んだ私は、市史編さん事業の立ち上げを知り、国分寺市でその経験を生かせないかと考え、図々しくも江戸時代の史料が読めて、探し方知っていますと売り込みました。しかし、実際に従事すると学生の浅い経験などさして役にも立たず、恩師に学生時代にも増してご迷惑をおかけすることになりました。

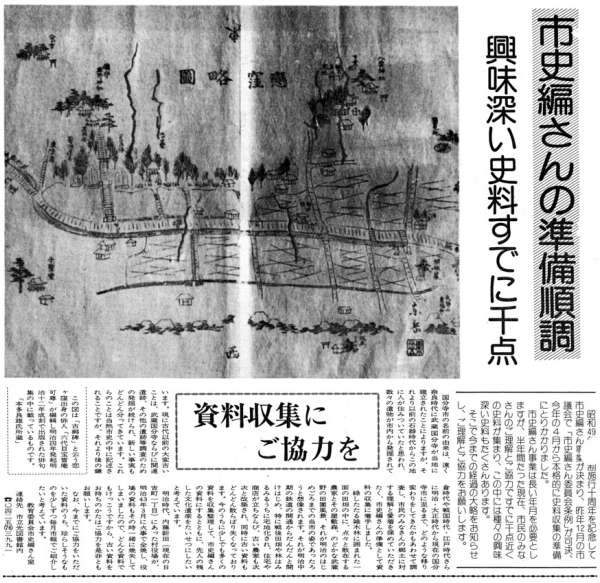
思い出せば恩師のみならず多くの方々のご指導、ご援助をいただいた35年間だったと感謝しております。

市に入職して直ぐに、私の人生を左右した、文化財保護審議委員で市史編さん委員のお二人の先生に再会しました。お二人は、私が市立第一中学校の1年生のときに参加した恋ヶ窪（こいがくぼ）遺跡発掑調査を指導されました。中学生の私は、シュリーマンやハワード・カーターの伝記を読んで憧れていましたから、実際に発掑調査が体験できて嬉しくて、その後歴史を学ぶことを目標とするようになりました。

昭和 39 年の恋ヶ窪遺跡発掑調査風景

昭和 39 年 10 月に町営水道管設置工事中に縄文時代中期の土器片や石器などが出土しました。これをきっかけに発掑調査が行われ、調査には市立中学校の生徒も参加しました。加曽利（かそり） E 式の土器や石鏃（せきぞく）、打製石斧、磨製石斧などが見つかりました。

恋ヶ窪遺跡Ａ号住居跡出土の釣手（つりて）形土器
国分寺市教育委員会所蔵（武蔵国分寺跡資料館展示）



市史編さんの準備順調
興味深い史料すでに千点

資料収集に
ご協力を

市報記事　昭和 51 年 10 月 15 日号

市史編さんは市制 10 周年を記念して昭和 51 年４月から本格的な各種資料の収集がはじまり、市民の皆さんの理解と協力を経てわずか半年で 1000 点近い史料が集まりました。

多摩遺跡まっぷ ◆41◆

中学生が発掑に活躍

縄文中期の大集落跡　「感動」伝える展示遺物

恋ヶ窪遺跡

中学生も参加して行われた発掑作業

読売新聞の記事（平成 10 年４月 18 日）

発掑調査から 34 年後に、当時の調査に関わった市内中学生の活躍などを紹介した新聞記事です。

市史の編さん過程では、残っていないだろうと絶望視されていた近世古文書が多く見つかり、それらの史料が生き生きと江戸時代の国分寺市内の歴史や人々の人生を語ってくれました。市内の面積の約60%を占める新田の開発の苦労。自然と闘い、利用して生活の向上を図る人々の知恵。心躍らせる神社の祭礼や寺院の行事。徳川幕府崩壊の瞬間に立ち会ってその混乱ぶりに“戦国とはかようなものかと”という感慨を書き留めた良助。身分が違うと結婚に反対され相手の家に押しかけてしまったおはる。江戸で一流の芸人になった安五郎。村人の先頭に立ち闘い死んだ六兵衛、などなど。

市史編さん室では、史料の調査・整理に従事して下さった方々、そして執筆してくださった先生方と出会えて、多くのことを学ばせていただきました。上・中・下巻の市史発行など一定の成果を上げ平成10年に編さん室は廃止となり、私は横滑りする形で文化財課（当時）へ異動となり今日に至りました。

市史編さんのための近世古文書調査風景（昭和 51 年）

享保 13 年（1728）から明治 4 年（1871）まで戸倉新田の名主を務めた戸倉家の古文書調査では、新田開発の成立に関わる史料や近世の村落行政文書などが残っていました。古文書総数は 1,459 点にのぼり、平成元年に「戸倉義助家古文書」（国分寺市教育委員会寄託）として市の文化財に指定しました。

国分寺市市史編さん委員会で編集した書籍（一部）

国分寺市市史編さん委員会では、『国分寺市史』上巻（原始・古代・中世）・中巻（近世）・下巻（近代・現代）、『国分寺市史料目録』Ⅰ～Ⅲ、『国分寺市史料集』Ⅰ～Ⅳ、『ふるさと国分寺のあゆみ』を編集しました。

国分寺市内の石造物調査（昭和 59 年）

国分寺市内の戸倉神社（戸倉 4-34）にある御大禮記念道路碑の前で撮影

振り返ると“35年のことは　夢のまた夢”という気持ちになりますが、今後は出会えた国分寺市や多摩地域の歴史を夢とせずに実像とする努力を続けたいと思っています。

最後になりましたが、諸般の事情で民俗資料室の入館が申し出制になるなど困難な情勢を抱えているふるさと文化財課職員の皆さま、支えてくださっている国分寺市職員と市民の皆さま、そのほか多くの皆さまに感謝申し上げます。僭越ですが、これからも国分寺市の文化財行政をよろしくお願いいたします。

太田 和子（おおた・かずこ）
昭和 26 年（1951）、東京都生まれ。
立正大学文学部史学科日本史専攻卒業。昭和 52 年国分寺市役所入職。教育委員会で国分寺市史編さん、文化財保護・普及行政等に携わり、平成 24 年３月に定年退職。３月まで教育部ふるさと文化財課文化財普及担当係長。

新たな文化財を指定しました

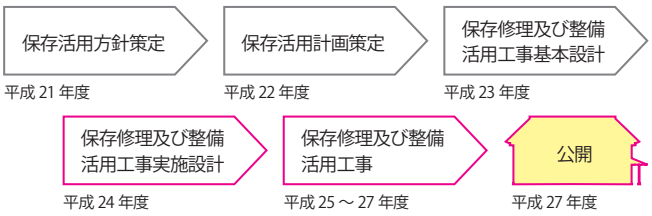
おたかの道湧水園内歴史的建造物が市重要有形文化財（建造物）へ

資料館だより５号でご紹介した国登録有形文化財の「旧本多家住宅倉」と「旧本多家住宅長屋門」の２棟は、劣化が進んでおり、調査の結果、大規模な修理が必要であることが分かりました。しかし国登録文化財の建造物については、指定文化財とは異なり建築基準法の免除などの緩和措置がないため、建造物の価値を継承するための大規模修理工事が困難となる恐れがありました。

そこで国分寺市教育委員会では平成 22 年度に策定した「おたかの道湧水園内歴史的建造物保存活用方針」に基づいて、翌年度に「おたかの道湧水園内歴史的建造物保存活用計画」を策定し、建造物の価値を損なわないために、文化財指定の保護の措置を講じて計画を実施することにしました。

そして平成 24 年 2 月 24 日に「国分寺市文化財の保護と活用に関する条例」（平成 23 年 4 月 1 日施行）に基づき、市重要有形文化財（建造物）として当該建物２件を新たに市の文化財に指定しました。

今後は平成 24 年 1 月にまとまった「おたかの道湧水園内歴史的建造物保存修理基本設計」に基づいて、平成 24 年度に実施設計を行い、来訪者や地域住民等の交流地点となり、まちづくりの核となる地域資産として保護、公開・活用を目指していきます。



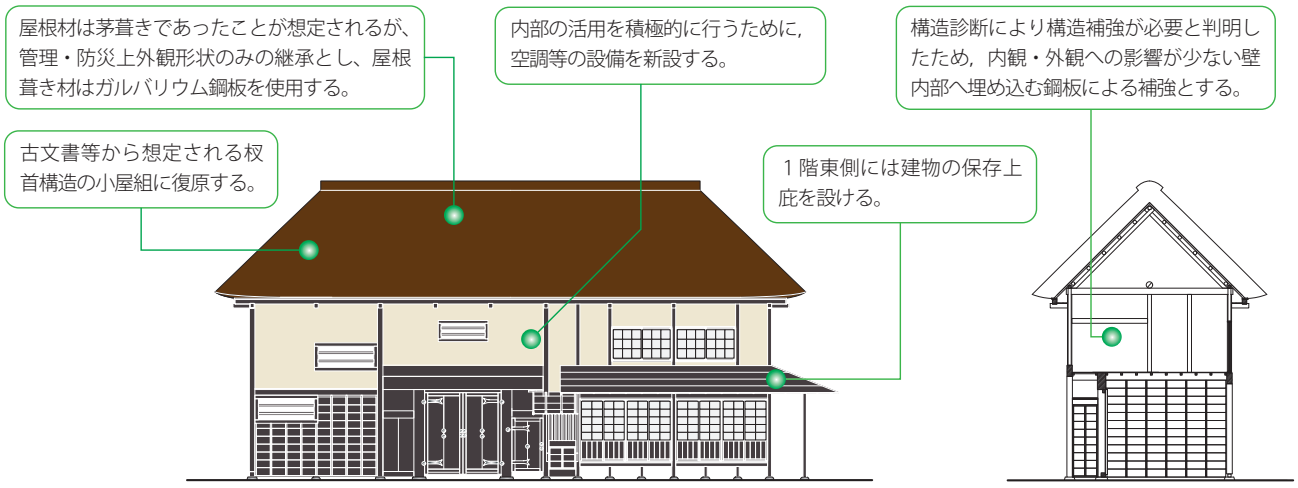
事業の進め方

名称及び員数　旧本多家住宅長屋門　１棟
旧本多家住宅倉　１棟
登録年月日　平成 22 年 9 月　国登録有形文化財（建造物）
指定年月日　平成 24 年 2 月　市重要有形文化財（建造物）
所在地　国分寺市西元町一丁目 13 番 10 号　おたかの道湧水園内
所有者　国分寺市

長屋門
建設年代：江戸後期（弘化 5 年（1848）の注文書による）

倉
建設年代：明治 33 年 12 月（棟木銘による）

詳しいおたかの道湧水園内歴史的建造物については
国分寺市のホームページでは、文化財指定した２件の建造物の紹介や今後の保存修理の概要を掲載しています。詳しくはそちらをご参照ください。



修理後南側立面図　　修理後梁行立面図

長屋門の復原と公開・活用
（おたかの道湧水園内歴史的建造物保存修理基本設計概要版より）

Events

史跡武蔵国分寺跡周辺の現地説明

ガイドボランティアが史跡武蔵国分寺跡周辺で現地説明します。

【日　　時】5月3日（木・祝）各20分程度
11：00～15：00の間で適宜行います。
※当日は直接解説場所へお越しください。

【解説場所】
①武蔵国分僧寺金堂跡②武蔵国分僧寺七重塔跡③国分寺楼門④真姿の池湧水群
【参 加 費】無料
【問合せ先】ふるさと文化財課　042-300-0073
※詳細は国分寺市報[4/15]・市ホームページでお知らせします。

文化財愛護ボランティア養成講座

史跡武蔵国分寺跡の発掘調査や史跡ガイドに携わるボランティアをしてみませんか。市では、「文化財愛護ボランティア」を養成する講座を開催します。

【コース】
○史跡発掘ボランティア
　史跡武蔵国分寺跡などの発掘調査に関わります
○史跡ガイドボランティア
　史跡武蔵国分寺跡周辺で文化財を案内解説します
【養成講座の日時】全9回（実習含む）
①6月17日（日）14：00～16：15
　国分寺市の歴史と文化財1　―旧石器・縄文時代―
②7月29日（日）14：00～16：00
　国分寺市の歴史と文化財2　―律令国家と国分寺建立の背景―
③8月26日（日）14：00～16：00
　国分寺市の歴史と文化財3　―武蔵国分寺の概要―
④9月20日（木）10:00～15:00（12～13時休憩）
　発掘実習（史跡発掘ボランティアのみ）
⑤10月28日（日）14：00～16：00
　国分寺市の歴史と文化財4　―中世の国分寺市―
⑥11月11日（日）14：00～16：00（予定）
　歴史講演会（予定）
⑦12月9日（日）14：00～16：00
　国分寺市の歴史と文化財5　―近世の国分寺市と建造物―
⑧1月20日（日）13：30～16：30
　ガイド実習（史跡ガイドボランティアのみ）
⑨2月17日（日）14：00～16：15
　国分寺市の文化財保護の歴史とボランティア〈認定式〉

※既にボランティア認定を受けている方で、別コースの認定を受けたい方は3～4時間のコース別実習の受講で認定をします。

【募集人数】史跡発掘ボランティア5名
　　史跡ガイドボランティア20名
【申込期間】5月18日（金）から31日（木）まで
【費　　用】無料
【申込方法】受講申込書を下記の方法で提出（先着順）
〈直　接〉ふるさと文化財課窓口　（武蔵国分寺跡資料館2階）
〈郵　送〉〒185-0023
　　国分寺市西元町1-13-10　ふるさと文化財課
〈F A X〉042-300-0091
〈E-mail〉bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp
※「受講申込書」は、ふるさと文化財課、史跡の駅（おたカフェ）、ひかりプラザ、オープナー（市役所附属棟）、文化財資料展示室（四中）、各公民館および、市ホームページからダウンロード（5月16日頃以降）もできます。
【講座会場】武蔵国分寺跡資料館、遺跡調査会事務所ほか
【問合せ先】ふるさと文化財課　042-300-0073
※詳細は国分寺市報[5/15]・市ホームページでお知らせします。
※⑥歴史講演会については内容が決まりしだい市報等でお知らせします。

講座聴講生募集

ボランティア養成講座の定員に空きがある場合は各講座とも一般の方の聴講を受け付けます。

【募集人数】各ボランティア養成講座の空き人数（未定）
【受付期間】6月11日（月）から各講座日の1週間前まで
【費　　用】無料
【申込方法】電話または直接ふるさと文化財課へ（先着順）
【問合せ先】ふるさと文化財課　042-300-0073
※詳細は国分寺市報[5/15]・市ホームページでお知らせします。

国分寺市歴史文化プロジェクト2012

国分寺・歴史文化プロジェクトは、本市の文化財の保存と活用を市民とともに考えるプロジェクトです。テーマ①では、星野義延さん（東京農工大学准教授）の指導で、おたかの道湧水園内の植物観察を行いその成果をまとめます。

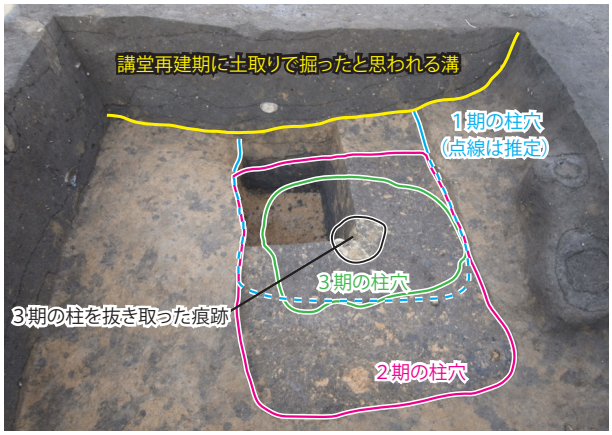
【テ ー マ】（全5回）
①おたかの道湧水園の自然環境を守ろう
②史跡周辺の案内板を良くしよう
③民俗資料室との連携・充実を図ろう・おたかの道湧水園内歴史的建造物保存修理事業を考えよう

【日　　時】各15：00～17：00（予定）
テーマ①5月19日（土）、6月23日（土）
テーマ②9月8日（土）、10月13日（土）
テーマ③12月15日（土）
【会　　場】武蔵国分寺跡資料館（講座室）ほか
【定　　員】30名
【申　　込】5月2日（水）から電話・FAX・E-mail（上記参照）または直接ふるさと文化財課へ（先着順）。
【参加費】無料
【問合せ先】ふるさと文化財課　042-300-0073
※詳細は国分寺市報[5/1]・市ホームページでお知らせします。

発掘調査の窓

国指定史跡

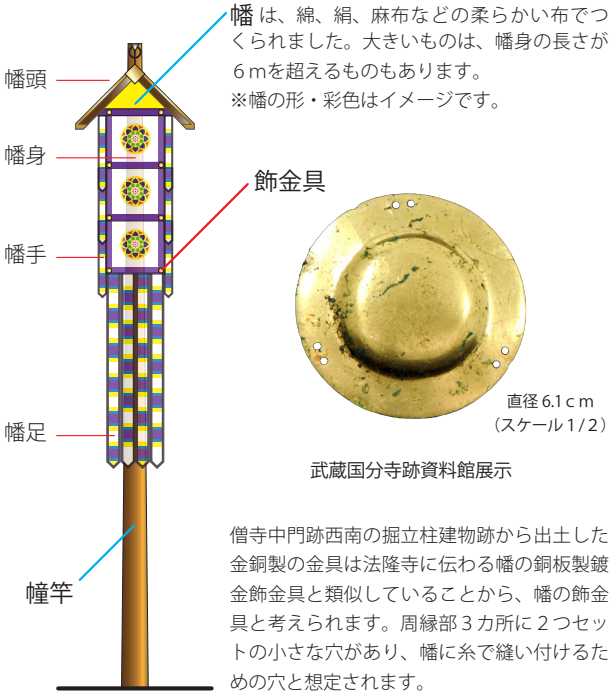
武蔵国分寺跡の調査 VOL.10 堂間地区（2）



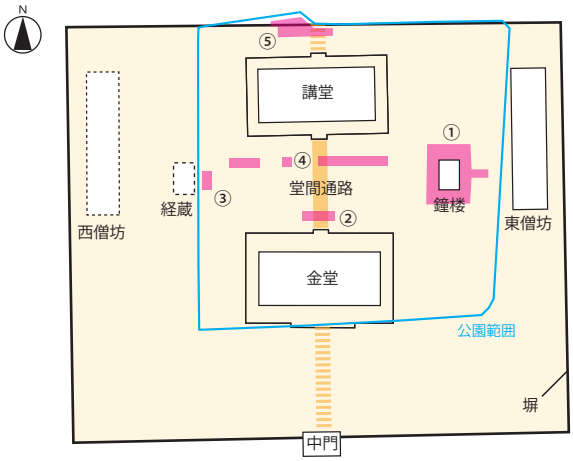
柱穴検出状況　（西から）

講堂の南側から、金堂と講堂をつなぐ瓦片や礫を敷き詰めた堂間通路の両側で（下図④）、東西に並ぶ柱穴が見つかりました。柱穴列は、講堂を再建する際に土を確保するために掘られたと考えられる大規模な掘り込みの下から見つかっています。このことから、柱穴は国分寺が建てられた創建期（８世紀中葉）から、講堂再建期（９世紀後半頃）の間に使用されたものと考えられます。

武蔵国分尼寺では尼坊と講堂の間に同じような柱穴が東西に並んで見つかっています。これは、護国を祈願する法会などの際に幡を掲げるための幢竿の跡と推定され、尼寺や僧寺の金堂前面地区でも確認されています。今回見つかった僧寺講堂前面の柱穴も、大きさや深さなどから幢竿を立てた柱穴跡と考えられ、場所によっては、数期にわたって立て直した状況がうかがえます。



幡と幢竿



平成23年度に実施した武蔵国分僧寺伽藍中枢部の調査地区

①鐘楼地区 ②金堂・講堂堂間地区（通路）③金堂・講堂堂間地区（経蔵跡）④金堂・講堂堂間地区（講堂南）⑤中枢部区画施設北辺地区

（ は発掘調査で規模が判明していない建物）

平成23年度の史跡武蔵国分寺跡の整備　整備編（2）

整備された石垣と新設した階段　（北西から）

国分寺市では、現在史跡武蔵国分寺跡の僧寺地区第一期整備を行っています。平成 23 年度は、環境整備として講堂北側の道路に面する石垣の一部について高さを下げ、西側に新たに入口の階段を設置しました。また、遺構を壊してしまう可能性がある樹木の伐採も同時に行い、北側から見た僧寺中枢地区の見通しが開放的になりました。今年度も引き続き、遺構の保存と、親しみのある憩いの場となるように歴史公園の整備を進めていきます。

なお、整備計画では、平成 23 年度より４年間の施工を予定していましたが、２年間延長の６年計画に変更しました。今後も史跡整備にご理解とご協力をお願いします。

民俗資料室の入館方法が変わりました

2012 年 4 月 1 日から、民俗資料室（本多 5-24-11）の入館方法が**事前申し出制**に変わりました。入館希望日の属する月の 6 ヵ月前の初日から 3 日前までに武蔵国分寺跡資料館へご連絡ください。

外観

展示室

民俗資料室利用方法のご案内

【休館日】月曜日（祝日・振替え休日の場合はその翌日）
　年末年始（12 月 29 日から 1 月 3 日）
【開館時間】午前 9 時から午後 5 時
【申出期日】入館を希望される日の属する月の 6 ヶ月前の初日から希望日の 3 日前まで
【申出事項】入館希望日、申出者氏名、人数、連絡先
【申出先】武蔵国分寺跡資料館の窓口へ直接または、電話（042-323-4103）、FAX（042-300-0091）、E メール（museum@city.kokubunji.tokyo.jp）

おたかの道湧水園を無料公開します

2012 年 5 月 3 日（木・祝）、4 日（金祝）、5 日（土・祝）はおたかの道湧水園の無料公開日です。新緑あふれる季節の湧水園をお楽しみください。
【開園時間】9：00 ～ 17：00（入園は 16：45 まで）

文化財案内看板が新しくなりました

東山道武蔵路跡の案内看板の一部が新しくなりました。恋ヶ窪地区（姿見の池）では、敷粗朶工法と呼ばれる版築道路が確認されています。武蔵国分寺ロータリークラブの20周年事業として、武蔵国分寺跡資料館で模式図等を加えて編集した看板が設置されました。また、西国分寺地区では切り通し状の道路が確認された地点で遺構再生展示を行っていますが、もともとあった案内看板が老朽化したため、説明を補足した看板を設置しました。場所は下の地図をご参照ください。

恋ヶ窪地区の看板
〈西恋ヶ窪一丁目〉

遺構再生展示の看板
〈泉町二丁目〉

来館者数

2009 年 10 月 18 日～ 2012 年 3 月末日

来館者数累計 39,706 名

多くのご来館ありがとうございました

月	来館者数	開館日数
1	653	24
2	710	25
3	823	26
計	2,186	75

○来館者数は、おたかの道湧水園の入園者数
○来館者数（　）内は無料公開日の入園者数
○開館日数（　）内は無料公開日の日数

【1月～3月の学校見学】〔学年〕、（人数）、中＝中学生、高＝高校生、大＝大学生
＜市内＞第七小学校〔小 3〕（45）
＜市外＞都立東高等学校〔高 2〕（5）

武蔵国分寺跡資料館ご利用案内

■交通のご案内
[電車]◎JR国分寺駅下車／徒歩約20分　◎JR西国分寺駅下車／徒歩約15分
[バス]◎国分寺市循環バス『ぶんバス』日吉町ルート「泉町一丁目」下車／徒歩約８分
◎国分寺駅南口より『京王バス』系統番号〈寺83〉・〈寺85〉乗車「泉町一丁目」下車／徒歩約８分

■開館時間
午前9時～午後5時（入館は午後4時45分まで）
■休館日
毎週月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）
年末年始（12月29日から1月3日まで）
※展示替えなどで臨時休館することがあります。
■入園料
資料館に入館するには「おたかの道湧水園」への入園料が必要になります。（入園券は史跡の駅で販売）
一般……100円（年間パスポート1000円）
中学生以下……無料
〔入園料の減免規則があります〕
（1）学校の教育活動で生徒（中学生を除く）、学生及び引率の教職員が入園するとき〔事前（7日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
（2）身体障害者及びその介護者が入園するとき
〔発券窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。〕
（3）その他教育長が特別の理由があると認めるとき
〔事前（7日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。

見る　学ぶ　訪ねる
武蔵国分寺跡資料館
Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

モバイルホームページQRコード